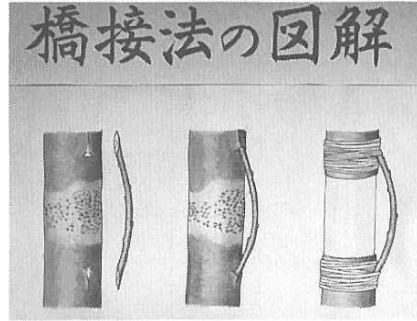


# 「接ぎ木」のはなし

北海道武蔵女子短期大学

教授 八 鍬 利 郎



▲写真No.1  
昭和天皇に説明するため描いた「橋接ぎ法」の図解（昭和29年）

北大の退官も目前にせまった、平成四年二月のことであった。私の描いた一枚の古い説明書が見つかったのである。

それは写真No.1のようにリンゴの「橋接ぎ」の仕方を三つの絵で示したもので、私にとっては大変なつかしい絵なのである。これを見ているうちに、昭和二十九年、昭和天皇が北大余市果樹園にご臨幸になられたときのこと、つい先日のごとくのように思い出されてきたのである。

当時の記録をみると、天皇・皇后陛下は、昭和二十九年八月七日から二十三日までの十七日間北海道を巡幸されたが、これは昭和十一年以来十八年振りのご来道であり、戦後の全国ご臨幸（沖縄を除く）の最後として北海道を巡幸されたのであった。そして北海道に渡られる時には連絡船の「洞爺丸」で函館に着かれ、お帰りは特別機で千歳空港から羽田空港に向かわれたが、例えばこれは天皇・皇后陛下下にとって最初の空の旅であったとのことである。

当時、助手になったばかりの私は、北大のカメラマンの一人とし

て天皇のお側近くで記録写真を撮る機会に恵まれたのも、今思うと大変幸運なことであった。

さて、行幸の一年ほど前、余市果樹園では「無剪定樹」と「橋接ぎ」によるリンゴの腐乱病対策を、陛下にご覧頂くことに決まり、早速準備に取りかかった。冒頭で述べた「橋接ぎ」の説明図は、そのとき陛下に分かりやすく説明できるようと、私の恩師である澤田英吉先生（当時の園芸学教授）から依頼されて描いたものであった。ここで簡単に「橋接ぎ」について説明したいと思う。

リンゴには腐乱病といって幹を腐らす恐ろしい病気があり、この病気が進むと樹全体が枯れてしまうのである。そこで幹の一部に腐乱がついた場合、写真No.1左図のように患部をまたいで橋をかけるように、若い健全な枝を接ぎ木し（写真・中央図）、活着したら写真右図のように患部を削り取る。そうすると新しく接ぎ木した枝が、従来の幹に代って立派に幹の役目を果たすようになり、大切な樹を枯らさずに収穫を続けることができるのである。

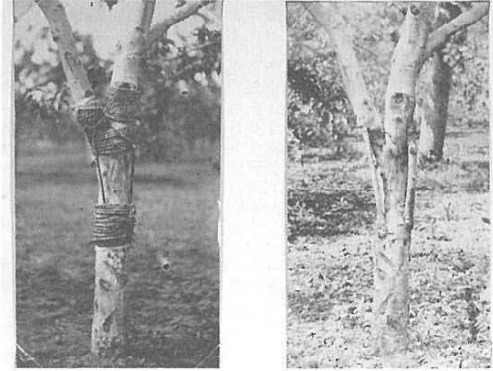


◀写真No.3

昭和天皇・皇后両陛下に説明中の澤田教授  
後方は橋接ぎによつて快復し、大樹になったリンゴ樹  
(切り取った古い幹の跡がコブ状に残っている)

写真No.2▶

橋接ぎ後の穂木の肥大  
(左)橋接ぎ直後(右)橋接ぎ1年後



写真No.2は、その経過を示したもので、接ぎ木後二年経つと、もう接いだ枝がかなり太くなっているのがよく分かる。

このように穂木の上下二カ所で接ぐ方法を「橋接ぎ」というが、その大変よい例、つまり、橋接ぎをして見事に腐乱病を克服し、大樹に育ったリンゴの樹が余市果樹園にあったので、これを陛下にみて頂こうという訳であった。

さて、昭和天皇は大変自然科学にお詳しいので、どの様なご質問が出されるか先生方は、大変気にしておられた。種々相談の結果、腐乱病についてのご下問があるにちがいないということになり、被害枝の見本をテーブルの下に準備しておくことになった。いよいよ当日、澤田先生のご説明が終つた直後に果せるかな陛下から「腐乱病とはどんな病気？」とのご下問があり、澤田先生が早速用意してあつた見本の枝を取り出して「これが腐乱病でございます」と説明すると、陛下が「あー、そう」と満足そうに頷いておられた、お姿が印象的であつた(写真No.3)

以上のような訳で、私の描いた

ささやかな説明図は三分間ほどの長時間に亘つて天覧の栄に浴したことになり、貴重な記念の作品として大切に保存したいと考えている。

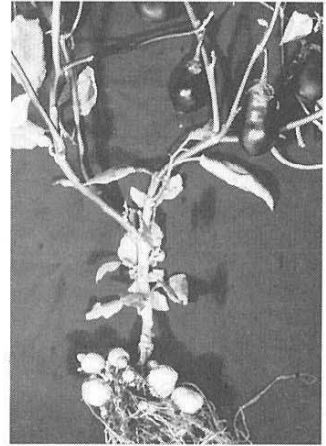
ところで、「接ぎ木」とは、「二つの個体の一部ずつをつなぎ合わせて新しい一つの個体をつくり上げる方法」で、根とする部分を台木、枝を伸ばす部分を穂木と呼んでいる。そして、多くの果樹や花木類の繁殖法として広く利用されており、この場合には普通「切り接ぎ」と「芽接ぎ」が用いられる。

リンゴなどの果樹の多くがタネ(種子)ではなく接ぎ木で増やされていることは一般に知られているようであるが、「タネの出来ない種類なら分かるが、立派にタネが入っているリンゴまでタネを使わないで、接ぎ木で増やすのはなぜだろうか？」となると、その理由はあまりよく知られていないようである。

いま仮に、大変立派なリンゴを一個もらい、食べてみると味もすばらしいので、是非この品種を自分で育てたいと思ひ、その果実に



八鍬 利郎（やくわ としろう）さん  
 1928（昭和3）年神戸市生まれ。昭和26年北大農学部卒。  
 昭和28年同大学院修了。同年から北海道大学農学部で教鞭をとり、  
 平成4年退官。この間、カナダBC州国立研究所留学。北大農場長、  
 園芸学会評議員、大学基準協会大学院問題研究委員会委員、北海道  
 種苗審議会委員、北海道園芸研究談話会幹事長などを歴任。  
 弘前大学、帯広畜産大学、北海道教育大学、酪農学園大学などの、  
 非常勤講師を務める。昭和59年園芸学会賞受賞。農学博士。  
 現在、北海道大学名誉教授、北海道武蔵女子短期大学教授、ホクレン  
 農業総合研究所顧問。  
 著書「北海道の野菜栽培技術」〈編著〉基礎編（上・下）、果菜・  
 根菜編、葉茎菜編。「北海道のタマネギ」。その他園芸学著書17編。  
 研究論文・報告など206編。



◀写真No.4  
 ナスとジャガイモの接ぎ木植物

入っていたタネを庭に蒔いたとする。タネが発芽して木が育ち、五〜六年目の春には待望の花が咲くであろう。ところが秋になって成熟する果実は、期待に反して親の果実とは全くちがった形と味なのである。これは、リンゴをはじめ多くの果樹は自家不和合性という性質をもっており、同一の品種の花粉では受精しにくく、他品種の花粉でよく受精するため、タネは遺伝的に雑種性になっているためである。接ぎ木は枝の一部を使って増やすので、遺伝子の組み合わせはそのままで親と同じ果実がつくことになる。このように、もし「接ぎ木」の技術が確立されていなかったら、おいしい果物や美しい花を咲かせる花木が育成されても、それと同じ形質の木を増やすことが出来なかつた訳であるから、「接ぎ木」はまさに園芸の技術の中でも傑作中の傑作といふべきであろう。

最近、札幌市内の街路樹に「ハナアカシア（ローズアカシアともいう）」や「パラソルアカシア」が見かけられるようになったが、これらは「高接ぎ法」といって樹

幹の高いところで接ぎ木されている場合が多い。

また、一つの台木に二種以上の穂木を、接ぎ木することもできるが、これは一本しか植えられないような庭の一隅でも、二種以上の品種が収穫できるという楽しさをもさることながら、果樹は一般に他品種の花粉でなければ受精しにくいので、授粉樹（花粉を授けるための樹）としての役割を考えた場合、大変合理的で興味深いアイデアだといえよう。

また、繁殖の目的以外にも「接ぎ木」は「矮性台木を用いた矮化栽培」、「ウリ類やナス、トマトなどの土壌病害の対策」、「イチゴのウイルス検定」など非常に広い場面で利用され、役立っているが、最後に私が作ったナスとジャガイモの接ぎ木植物の写真を紹介しよう（No.4）。ナスもトマトもジャガイモも同じナス科の植物なので、地上にナスとトマトを实らせ、地下にジャガイモをならせることも可能であり、「接ぎ木」とは何とも興味ある技術だと感心させるを得ないのである。